

日语综合辅导：古都 PDF转换可能丢失图片或格式，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/238/2021_2022__E6_97_A5_E8_AF_AD_E7_BB_BC_E5_c105_238800.htm 「古都」はなんとも心地よい、しい感じのする物である。それは、全を通して流れる京都弁の、やかなきが大きいだろう（川端氏の意志で、あえて、京都弁ではないままに残した部分もある）。そして又、京都の物や四季の移りわりも、勿そいったを盛り上げている。だが、何よりも、北山杉の村の澄んだ空感を背景に生きる苗子と、中京の服屋に拾われて育った千重子妹の娘らしい心の描写が、物のしさを定づけているのではないだろうか。同じ京都を舞台に描かれた「美しさと哀しみと」に比べても、遥かに静かでおやかなの流れ方である。妹の去にがる背景の重さも、してやりきれなさに通じる事なく、そこにあやどられる淡い恋感情もあって、静かな柔らかさを助している。そしてこの物の特のひとつは、それまで知られていた、神社の散在する京都市街ではなく、外れにある北山杉の村を舞台とした事だろう。この所は「京都」という、やかだがしかし、尚かつ日本人の心のふるさとたる静な所を後ろに、一きをしている。1996年12月の初め、京都に初雪の降った翌日、私は京都からタクシをチャタして、北山杉の村（勿今は村ではない）へ向かった。そして一半、バス停を目印にその所を探すと、写真や映画でたままの景色がそこにはあった。道路沿いの川向こう、を架けた先に、杉丸太を磨く家々のんだ所である。「停めて下さい。」思わず言ったが、道幅は狭く

、道にを停めると、明らかに通行の邪魔になる。手は杉丸太の家に架かるの上にかちにをり上げた。しかし、このりの人はしく、手が「古都」の舞台をたいという客をせて来た事をすと、「そういう事なら、もっと奥迄入り」と言ってくれた。私は安心してタクシをれた。せめて杉林の中に入れてみたい。道路を渡って山の上へ向かっていく石段を上ると、そこはまだ昨夜降った雪が足もつかないままだった。雪に舞い落とされたらしいのが散在している。思わず特にやかな朱と黄のをんで手に挟む。流石に杉林の奥迄はたどりつけない。けれど、私はその外れに立って、真直ぐな杉の群れを上げていた。ふと、足元をると、日に灯りを灯したに、南天のが色にれていた。杉林の中の苗子であるながして、思わずシャッタを切った。杉山を降りると、川向こうの家の中で、年配の女性が独り、丸太を磨いているのがみえた。仕事の中まで入りんで、写真を撮らせてもらう。彼女は快くしてくれた。本当にこのりの人はしい。磨き是一部械化されているのに、少しがっかりもしたが、おそらくは年々る人と、それに伴って高年化する者の酷なをするには、他に肢のい道だろう。「大な仕事だからね。」彼女の言に、私はこの杉山の行く末を思わずにはいられなかった。このしい所に、を下げてれを告げた。タクシで更に北へ向かう。その先には北山杉を後世にも残すの、北山杉料があり、そこには川端康成のいた「古都抄」の碑と、千重子、苗子の像があるのだ。杉丸太を磨く家々のある所から、北山杉料迄はわずかな距なのに、そのにも、晴天だった空にはががり、かな雨も降りだした。折ちらちらと雪

も混じっている。「周山の方から北山しぐれが来ましたんやろ。山の上の杉も……。」苗子の声がこえたながした。降っているのかいないのか、るな杉山の中、料でタクシを降りると、真っ先に川端康成の文学碑へと向かった。文学碑への道には、ここにも雪に舞い落とされたらしいが、まるで敷きめられたに地面を覆いしてがり、うっすらと白粉を散らしたに雪化されていた。それはあたかも、美しい反物なので、その光景に中京の服屋で育てられた千重子が、ふとに浮かんだ。真っすぐな杉を背景に建つ妹の像と、文学碑は、心なしか寂しにえた。「古都」の物は、々の境で育った妹が千重子の家で一夜を共にし、ちらちらと雪の舞う朝、れて行く所でわる。妹としての幸福な一夜を抱いて、苗子は北山杉の村へってゆく。しい物のままわるのである。川端康成は、「古都のきはきたいが、けばこの妹は不幸になって行くながする」というな事をつている。北山杉料を後にして京都市街へるが、このままへ向かってしまうのは惜しいがしていた。「清水さんへ行って下さい。」そこは、千重子が初めて真一に自分が子である事を打ち明けた所なのだった。 100Test 下载频道开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com